ありのままの自分～左利きの私～

皆さんは「箸を持つ方が右」という言葉を掛けられたことはあるでしょうか。

私は、幼少期には左手で箸を持っていたので、このような右利きを前提とした言葉を掛けられると、左右がよく分からなくなり混乱していました。大人になった今でも運転中などでとっさの判断をしなければならないとき、右と左を間違えることがあります。それは「左右盲」といわれ、左利きや利き手の矯正をした人によく見られるようです。

その後小学校に入学するとき、箸を持つ手を右手に矯正されました。これは隣で食事をしている人に腕がぶつかって、迷惑を掛けないようにという両親の思いがあったと聞いています。私自身納得して、右手に持ち替えたことを覚えています。現在も箸を持つとき以外は、利き手である左手を使う私ですが、箸を右手に持つことに不満はなく、むしろ食事が準備されたときに箸の向きや、配膳の並べ方などを気にしなくてもいいので持ち替えたことに満足しています。

私の母も左利きだったのですが、母の時代は左手で箸を持つと「しつけがなっていない」と言われ、強制的に右利きにされたそうです。そういった社会の中で育ってきた親ならば、子どもの利き手矯正を考えてしまうのではないでしょうか。しかし、親が良かれと思い子どもの利き手を矯正することで、結果的に左右盲を生み出すことになっているかもしれないと考えると、本当に子どものためになっているのか疑問に思うところがあります。

昨今は、左利き用のはさみや定規などさまざまな左利き用のツールが生み出され、特に意識することなく生活できることが多くなってきていると感じます。また、左手で箸を持つことを否定的に言う人も減ってきているように感じます。

私の左利きは一例ではありますが、左利き用のツールが作られてきたように、私たち大人がこれまでの慣習や価値観で判断せず、むしろ子どもたちの意見に共に耳を傾け、知り、考えていくことでさまざまな個性の子どもが、自分らしく安心してありのままに暮らせる社会をつくっていくことができるのではないでしょうか。

(30代・男性)

人権豆知識

三重県では、性の多様性を認め合い、誰もが安心して暮らせる三重県づくり条例の趣旨に基づき、「三重県パートナーシップ宣誓制度」が今年９月から始まりました。この制度はお互いを人生のパートナーとし、日常生活において相互に協力し合うことを宣誓した二人に対して、県が宣誓書受領証などを交付する制度です。

性の多様性が理解され、性的指向や性自認にかかわらず、全ての人の人権が尊重され、多様な生き方を認め個性を尊重し合える社会を実現していきましょう。